
異世界奮闘記

蜜柑汁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界奮闘記

【Nコード】

N1616I

【作者名】

蜜柑汁

【あらすじ】

”変わった生物”に好かれるという体質を持つ秋斗は夏休み1人寂しくゲームをしていた――筈が突如異世界にトリップ。そこでは秋斗の存在は災いと呼ぶと言われていた。

第1話＊日常の閉幕

「あーもう！」

苛立ちを抑えられず、赤に黒のメッシュが入った如何にも不良を思い出させる髪青年——はたもと あきと端元秋斗はゲームのコントローラーを放り投げた。

外は35 を超える猛暑。蝉は休むことなく鳴いている。

秋斗が通う高校は、つい1週間前に夏休みに入ったばかりなのである。

高校の夏休みといえば、旅行や部活で充実した日々を送る者が大半だ。

だがその中でも一部だけ、旅行に行くワケでもなく、かといって部活が忙しいというワケでもない、所謂”暇人”がいたりするものだ。

秋斗もその一人である。

秋斗の父はもともと海外での仕事のため、家にはめったに帰って来ない。母はというと、普段は家で家事をしながらデザイン系の仕事をしているのだが、夏休みに入ってすぐに大きな仕事が入り、現地に呼ばれたため、家には3日前ぐらいからいない。

つまり端元家では現在秋斗一人しかない。

それをいいことに、秋斗はこの夏休みを満喫しようといういろいろな計画を立てていた。

だがそれは計画で終わってしまった。誘った友達は皆忙しいようだ。

クーラーは生憎故障中のため、秋斗はこの暑い中、自分の部屋で扇風機を傍らにゲームをしていた。

だがかれこれ約1時間。あるステージのボスがなかなか倒せないでいた。

サウナのような所にずっといることと、思うようにゲームが進まないこと。そのダブルパンチで苛立ちが頂点までに達し——冒頭に戻る。

ガッンッ

コントローラーはゲーム機本体に勢いよく当たった。その衝撃で、テレビ画面にはさっきまで動いていた主人公キャラクターが停止している。BGMに至っては、ピーっという如何にも”壊れました”的な音がしている。

一瞬思考が停止していた秋斗は、ハッとなってゲーム機本体に飛びついた。

「お、おい！コントローラー軽く投げただけだぞ！？」

そう口走った後、混乱しながらもなんとかしようとりあえずゲーム機本体を叩いてみた。

秋斗の行動に機嫌を損ねたように画面は、数秒ぶれたと思ったら、ザーッという音をさせながら映らなくなってしまった。

「……………まあ…壊れてしまったもんは仕方ねえか」

諦めは早い秋斗であった。

集中力が一気に切れて、小腹がすいてきたと感じた。今は昼過ぎ。そういえばまだ昼飯を食べていないことを思い出す。

「とりあえず飯でも食うか」

そう言って立ち上がろうと手をついた。その時――

――
感覚のようなものが頭の中に流れ込んできた。

秋斗は吸い寄せられるようにテレビを見た。

外では蝉が鳴いている。すぐ横では扇風機の動く音も聞こえる。

だがそこには違和感があった。

まるで同じ場所にあるのに、秋斗とテレビだけが空間を切り離された感覚。

何も映らなくなったはずのテレビは、白い画面に、中央には何やら言葉が並んでいる。

「『――汝、我ニカヲ貸シタマエ』…?」

画面は復唱する秋斗の言葉に応えるかのように、プツンと消えた。

「????」

秋斗の頭の上にはいくつもの“?”が浮いている。

く　　く　　く
　　く　　く　　く

秋斗の混乱は聴き慣れた着メロによって打ち切られた。この曲は着信音だ。

すぐ横に置いてあるケータイのディスプレイで、電話を掛けてきた相手を確認する。そしてディスプレイに表示された名前を見て溜め息を一つ。

秋斗は昔からいい意味でも悪い意味でも、とにかく何故だか”変わった生物”に好かれる体質だった。

例えば秋斗が5歳の誕生日で動物園に行った時のことだった。上から見下ろす形でライオンを見ていた秋斗だったが、誤って檻の中に落ちてしまった。秋斗の両親を始め、周りにいた人々は例外なくもうダメだと思ったその時――、

ライオンは秋斗の担いでいたリュックをくわえて寢床まで歩いて行き、寢床に着き秋斗をゆっくりと下ろすとそのまま秋斗を包むようにして寝てしまったのだ。

その場にいた人々は目を点にして、しばらく固まっていたのだった。ライオンが目の前にして、泣き泣きの秋斗を除いて。

秋斗は鳴り続けるケータイの通話ボタンを押し耳に当て、相手に文句を言おうと口を開いた。

「《よおあっチャン。家でのグダグダライフ満喫してるかー?》

………思いっきり言葉を遮られた。そうだこいつはこっぴどい奴だった。

「ほっとけ。つかお前こそ最近知り合った女の子と旅行を満喫して

るんじゃないかったのかよ」

《ああ、あれか？残念ながら罠だったわ。待ち合わせの場所で襲われた》

話している彼の声は、全然残念そうではない。

「ヘッ。日頃の行いだよ、バカ暁人」

秋斗の言葉に彼は、俺は存在自体が善良なんだよ、と飄々と応える。

「地元最強と言われる不良がよく言っぜ」

そう彼——さきもり あきと 崎守暁人は地元最強と言われ、そこら辺の不良で知らない者はいないとまで言われるほどだ。（本人自覚なし）

さらには成績優秀、超イケメンと所謂”完璧人間”なので学校のほうでも有名だ。

そんな彼も例により秋斗の特異体質が発動した”変わった生物”なのである。

秋斗と暁人が知り合ったのは、2人が高校に入ってすぐのことだった。

2人は同じクラスだった。暁人は同じ名前を持つ秋斗に興味を持ち、声を掛けた。（誕生日も同じだった）

そして今に至るのである。

ちなみに秋斗の髪をメッシュにした張本人だ。

夏休みに入る前にある賭け事をし、その結果、生まれてこの方1

回も染めたことがなかった黒髪はド派手な色となったのだった。

《失礼な。紳士な俺を不良と一緒にすんな》

どこがだどこが。

いきなり自分達の世界に現れ、ほんの数日で”最強”とまで言われるようになった暁人を気に食わないと思っっている不良も少なからずいるらしい。（大半は触らぬ神に祟りなしといった感じだが）こっうやって襲われるのも初めてではない。

暁人はその度に返り討ちにしているので、さらに不良達に反感を買っう。まさに悪循環。

暁人曰わく、ただ売られた喧嘩を買っただけらしいのだが。

「で、用件は？」

暁人のことだ。なんで電話してきたのかは大体予想がつく。だがとりあえず聞くだけ聞いてみる。

《それなんだけどよお、あっチャン今暇だよな》

予想的中。当たっても全然嬉しくない。

待ってました。といわんばかりに話を切り出す暁人。そこにあるのは疑問符が付いてない疑問文。

「悪かったな暇だよ」

《怒んなって。今から家行っていいかー？》

「お前なあ。確か休み前に結構女子に誘われてたんじゃなかったか？」

それも同級生だけではなく、先輩からも後輩からも。それに若い先生から誘いがきいていると聞いた。さらには暁人の姉の友達（多数）からも。

少しぐらい分けて欲しいものだ。

《なんかもうめんどくなくてきたから全部キャンセルするわ》

「はいはい、全部キャンセルね…ってハア！！？」

そう、今電話の向こうにいる奴は、男なら誰もが嬉しい女性からの誘いをすべて蹴ったのだ。すべて。

《あつちゃん五月蠅い。それに俺その誘いにはつきりとOKした覚えないぜ》

暁人の言うことにも一理ある。その誘いはすべて暁人の返事を聞かず、押し付けのようなものだった。

「はあ、お前なあ。今の発言でほぼ全世界の男を敵に回したぞ」

《ははっ。んな大袈裟な》

結構本気だったりする秋斗。

《じゃ、今からあつチャンの家行くぜ》

そう言つと、暁人は返事も聞かずに電話を切った。

「はあ」

思わず溜め息が出る。だがこれで暇にはならなそうだ。そういう意味では暁人に感謝、と頭の片隅で考える秋斗だった。

く　　く　　く

再び着信音。

暁人が何か言い忘れたのだろう。

「はいはい、何言い忘れたわー」

秋斗の言葉は最後まで続かなかった。

《――――》

明らかに相手の様子がおかしい。聞こえてくるのは、ブツブツと聞き取れるかどうかといった声のみ。

暁人の新手の嫌がらせという考えも浮かんだが、それもやっと聞き取れた言葉によつてすぐに消えた。

《――― 汝、我ヲ求メヨ》

半ば反射的に秋斗はテレビに映つたアノ言葉を思い出した。

――― その刹那

秋斗は自身に何が起こったのかまったく理解できなかった。
不思議な感覚。それは浮遊感のような。それは風邪を引いたとき
に起こる頭痛のような。それは胃の中にあるものが逆流してくるよ
うな――

そこで秋斗の意識は闇に落ちた。

第2話＊夢か現か（前書き）

お待たせしてすみません；；；

やっと2話できました！

感想・指摘・アドバイス気軽にどうぞ！

お待ちしております♪

第2話＊夢が現か

「ーん、ー」

何故だか頬がくすぐつたい。

まだ半覚醒で脳内がぼーっとしている中、重い瞼をゆっくりと開けた。

そこにはー、

「ニャー」

黒猫がドアップで秋斗の視界を埋めた。

「ぬをつ！？」

そこで一気に覚醒。勢いよく体を起こすと同時に、反射的に片方の手を頬にやる。

秋斗の上にいた猫はというと、秋斗の突然の行動に対し、特に驚いた様子も見せず秋斗の上から下りた。

頬は少しベトベトと湿っていた。どうやらこの猫が舐めていたようだ。

なんで猫が…てかさっきの感覚は一体…？？いやいやそんな事よりも！

「どこ…どこだ…？」

秋斗が倒れていた所とは、さっきまでいた住み慣れた空間ではなく、見たこともない裏道のような所だった。

「ニャー」

かなり混乱している秋斗を呼び戻したのは黒猫だった。

黒猫は表通りと思われる方向に体を向け、秋斗の様子を窺っていた。

その姿は——単なる秋斗の考え過ぎなのかもしれないが——秋斗を導いているようだった。

「…お前が案内してくれるのか？」

黒猫はジッと秋斗を見据える。

何か手掛かりを掴んだ訳ではない。ただ絶対的な確信が秋斗にはあった。自然と秋斗は立ち上がり、黒猫の方に足を進めていた。

黒猫はそれに満足したかのように一声鳴き、歩みを進める。

黒猫を追うこと数分。いくつ目の角を曲がると、そこにはいくつもの露店と、賑わった人々の光景が広がった。

「……まじかよ」

秋斗の視界に入る人々の髪や眼は、見慣れた黒や茶は勿論、赤やら青やら緑やら…色とりどりだった。（↑人のこと言えないが）

「俺、知恵熱で幻覚見え始めたかな…」

ただゲームをしていただけである。

やや現実逃避がちだった秋斗だったが——、

「止めて下さい!!」

はつきりとした拒絶の声が耳に飛び込んで来て、一気に現実引き戻された。

高さからして、声の主は女性であろう。

声が出た方を見てみれば、大柄な如何にも考えより先に手が出るであろう男、その後ろに細身の男と小太りの男がいた。どうやら大柄な男がリーダー格のようだ。

それとさっきの声の主と思われる女性が男達に囲まれていた。

「おいおい姉ちゃん、人にぶつかつといて謝罪もなしなのか？」

「だから謝つたじゃないですか！」

成る程、大体は理解。要するにあのネーチャン絡まれた訳だ。それもかなり質の悪い奴に。

……にしても…、

道行く人々で女性を助けようとする者はいなかった。

事を横目にそのまま通り過ぎて行く者、お前助けてやれよ・等と呼びかけ結局遠目で見ているだけの者、そもそも始めから気付いていないかの様に通り過ぎて行く者。

女性も強気で言い返してはいるが、若干声が震えている。

そんな光景に秋斗は腹が立った。男達には勿論、周りの人々に対してもだ。普段は面倒臭がりだが、”お年寄りは大切に”等、自分の芯は通す。それが端元秋斗なのだ。

つまりこの状況も秋斗の芯に反するのである。

「姉ちゃん勘違いしてねえか？謝るつてのはもつとやり方があるだろ？」

「きゃっ」

大男が女性の腕を無理矢理掴み、引き寄せようとした。

「はい、ストップ」

——が、秋斗が男の手首を掴み、止めた。

突如現れた秋斗に周りは啞然としていた。が、女性はすぐに我に返り、男の手から逃れ、秋斗に小さく礼を言った。

「いいから早く行つて」

秋斗の言葉に女性は頭を下げてその場から離れた。

男達はその一連のやり取りを目を文字通り点にしながら見ていた。そしてたつぷり一息。一斉にハツとなり、秋斗を睨みつけた。

「てめえ、何しやがる」

凄みを効かせた低い声。だがさっきの間抜けっぷりをしっかり見ていた秋斗にとっては、怖くもなんともなかった。

「さっきの人、嫌がってたじゃん」

「あゝあ！！？」

手首を掴まれていた男は、手を振り切り、秋斗の胸倉を掴み持ち上げた。

「だから——待てよ兄貴」

秋斗は言い返そうとしたが、男の横にいた2人のうち、細身の男によって遮られた。

「こいつの頭」

細身の男の言葉を、もう1人の小太りの男が繋げた。

その言葉を聞いて、大男は秋斗の頭——むしろ髪を見、ニヤリと笑った。

「てめえ、よく見れば」出来損ない”じゃねえか」

——ブチン

「？兄貴、今変な音——」

メリッ

そんな音と共に、左頬に痛みを感じたと思ったら、すでに俺は地面とお友達になっていた。（b y・最近若干腹回りが気になってきた俺

「ブッタ——」

秋斗が小太りの男——ブッタに蹴りを入れたのだ。その蹴りはブッタの左頬にクリティカルヒット。予想している筈もなかったブッタは勿論反応することは出来ず、何の抵抗もなく蹴りを受けたのだった。

細身の男は見事に倒れたブツに駆け寄る。

大男はブツが倒れた原因——秋斗を更に睨んだ。

「てめえ……」

秋斗は俯いていたまま、ワナワナと怒りを抑えつける様に震えている。

「アンタさあ、人には言っていない事と悪い事があるんだよ」

そう言い、勢いよく顔を上げる。

「そういった何気ない一言がその人を傷つけるんだよ！でもってそれが発展していった差別になるんだよ！！」

秋斗は昔から例の（・・・）体質のおかげで、裏で変な噂やら伝説やら、いろいろ言われて来たのだ。それらは悪口という訳ではないのだが、噂が噂だけに一般人からは軽く引かれ、逆により一層所謂”変わり者”が寄り付いて来たのだ。

「言われた方の気持ち考えた事あるか！？ある事ない事言いやがって！俺に寄り付いて来る奴らが変人なだけであって、俺は至って普通だ！！一般人だ！！！」

最後の方は私情を挟みつつも、言い切った秋斗は肩を上下させていた。

聞いていた大男に至っては少し引きつつも、秋斗に少しばかり同情していた。が、今さっきまでの状況を思い出し、拳を作り、振り被った。

「ほざけっ——！」

秋斗に狙いを定め、振り下ろす。

「——ぐへっ！！」

短い悲鳴の様な声。

だがそれは秋斗のものではなかった。

大男は秋斗めがけて拳を振り下ろしたが、拳はターゲットに当たる前に阻まれた。細身の男が勢いよく秋斗達の方に飛んできたのだ。

「ヤンス！！？」

大男が——多分細身の男の名前であろう——声をあげる。

秋斗も予想外の事に少しの戸惑いを見せつつ、ヤンスの飛んできた方向を見た。

そこにはフルフェイスの兜と鎧を纏った数名の人間と、その一步前に他とは違い兜をしていないカールのちよび髭の男がいた。

男は秋斗と大男をそれぞれ見、それから忌々しいといった感じに顔を歪めた。

「貴様らか、騒ぎを起こしていたのは。現在この街にアリアルヴィス・マナ・セルディア姫が来ておられるのを知っての事か！！」

「んなもん知るかよ！！」

怒りを剥き出しにして、大男はちよび髭に飛びかかっていった。ちよび髭の回りにいた鎧はちよび髭を守ろうと一歩前に出ようと

したが、ちよび髭はそれを手で遮る。

「いい」

それだけ言うと、ちよび髭は迫って来る大男を最低限の動きで足を引つ掛ける様に避けた。大男は言うまでもなく1回転し、仰向けに倒れた。そしてちよび髭は合わせる様に腰にある剣を抜き、大男の鼻先ギリギリの所で剣先を止めた。

その間数秒足らず。流れる様な動きは、ちよび髭の強さを物語っていた。

「貴様の行動、”死んでもいい”という事だな…？」

「くそつたれ…！」

大男は悪態をつくが、ちよび髭はそれを気にする事もなく剣を構え直す。

「ちよ、ちよつと待てよ、おっさん…！」

秋斗の何気ない”おっさん”発言にちよび髭はピクリと反応し、剣先を秋斗の方に向ける。その顔にはさっきの歪んだ表情に青筋がプラスされていた。

「私はおっさんではない…！」

秋斗の発言で周りの鎧達がひそひそと話しているが、ちよび髭の鋭い睨みによって話を止め気を引き締める。

ちよび髭は再び秋斗を睨んだ。

「…貴様、よく見れば”混濁種”か」

「は？何言って——」

——鈍い音。

秋斗の言葉は最後まで続かなかった。後頭部をいつの間にか背後に回っていた鎧の1人に、鈍器の様なもので殴られたのだ。

秋斗の視界はそのままシャットダウンした。

秋斗が倒れたのを見てちよび髭はフンと鼻を鳴らす。

「混濁種風情が…！」

秋斗を殴った鎧がちよび髭の下まで行き敬礼した。

「大佐、どうなしますか？」

「こいつら全員牢にでもぶち込んでおけ。処置はその後でもよからう」

『はっ！—！』

ちよび髭の言葉にその場にいた鎧全員が敬礼した。

第3話＊老婆と馬鹿と時々主人公（前書き）

大変遅くなってすみませんm（――；；）m
とりあえず、前話の反省を生かしてとにかく読み手に読みやすく！
と、書きました。

感想・アドバイスを待ちしております

第3話＊老婆と馬鹿と時々主人公

頭がズキズキ痛い…。

…そうだ、俺はちよび髭の部下らしき奴に殴られたんだ。

てかマジ痛え。もつと加減してくれたっていいじゃねえか。

そもそもあの髭何なんだよ。何であんな中途半端に残ってるんだよ！いつその事剃った方がよくね？？

…って！話が逸れた。

いや、そんな事よりも、…俺何かさつきから^{こんなの}気絶ばっか！！？

「——何なんだよ、この役回り！！」

覚醒第一声。秋斗の声が反響する。

頭が冴えてくると同時に、冷静になる思考。とりあえず何らかの情報を得ようと、秋斗は辺りを見渡した。

目がだんだんと暗闇に慣れてくる。どうやらここは個室のような所らしい。だがやはり辺りは暗い事には変わらず、正確には分からない。

「ひっひっひ。随分と賑やかな囚人だねえ」

自分がいる空間の奥から突然おかしな甲高い笑い声が聞こえたと思うと、今度はうつすらと灯りが秋斗の顔を照らした。

小さいとはいえ、いきなり光で自分の顔を照らされた秋斗は目を細める。

「おや、また《…》ガキとはのう」

その声は驚きを零した。

秋斗は慣れてきた眼で声の主を確かめる。

そこには腰は曲がり、顔はしわくちゃで、飛び出んばかりの眼をした老婆がいた。老婆の片方の手には、灯りの元である蠟燭がある。世間一般の人10人に聞けば10人が”不気味”と答えるであろう異常な容姿をした老婆。だが右も左も分らない所で1人いた秋斗にとっては、どんな容姿だったとしても人がいるという事で安心感を持てた。

「あ、あの…ここは一体…？」

そんな秋斗の言葉に、老婆は少しの間キョトンとした顔になったが、すぐにそれは笑いの表情へと変わった。

「何言つとるんじゃ。牢に決まっておるわ」

再びおかしい笑い声。

この婆さんは自分の笑い方に疑問を持った事はないのだろうか…？

秋斗は違う点に首を傾げながら、老婆の言葉の意味をゆっくり噛み砕いていく。

「成る程、牢か……って牢!!？」

「ひっひっひ、いちいち反応が面白い小僧だねえ」

あなたの笑い方も充分に面白いと思うのですが…。

だがあえて口には出さない。その一言で面倒臭い事になるのを秋

斗は熟知しているのだ。

意識が途切れる前の記憶を思い出し、推測する。多分……てか100%あのちょび髭に連行されたのだろう。喧嘩売るような真似もした事だし。

だとすると――、

「ニャー」

思考一時停止。

突如特有の場を和ませる鳴き声が響いた。

振り返る。

見えるのは鉄格子。特に驚く事ではないが、改めて自分は牢にいるんだ、と実感する。

視線をそのまま下へ。ほら、やっぱりいた。

「ニャー」

そんな秋斗の思考に応えるかのようにもう一鳴き。

鉄格子を挟んだ向こう側には、ちょこんと座る1匹の黒猫。

老婆はその光景を見て、驚いた素振りを見せた。

「ほう、黒猫とは……珍しい事もあるものなのう」

「へっ？ただの猫じゃん」

「阿呆が。黒猫は警戒心が強いんでめったに人前に姿を見せん。常識じゃろ」

——”常識”ねえ。

心中でさっきまでいた自分の空間^{せかい}とを比較する秋斗。

「でもさ、俺今日で2回目だぜ。黒猫と会ったの」

言いながらしゃがんで黒猫の方へ手を差し出す。黒猫は差し出された手に興味を示したのか近寄って来た。

——、

飛び出さんばかりに眼を見開き、目の前の光景を凝視する老婆。秋斗がしゃがむと、当然老婆は秋斗を見下ろす恰好となった。蝋燭の灯りは秋斗の背中を照らす。

さっきまでは身長差のせいでよく見えなかった首から上も、今は老婆からものはっきりと見えた。

そう、

どこまでも深い”漆黒”と、

何よりも映える”紅”

もはっきりと。

「——じゃ」

「えっ？」

婆さんが呟いたが、その内容は聞き取れなかった。聞き返そうと婆さんの方に向き直ろうとしたが——、

「勇者様じゃああああ！！！」

突然婆さんが凄まじい形相で飛びかかって来た。眼は爛々として
いる。

そんな俺は持ち前の運動神経で婆さんを避ける——なんて格好い
い事できる筈もなく、体勢を崩し、

ゴン

倒れると共に、見事に鉄格子に頭をぶつけた。普通に痛かったり
する。

そこからは見張りであろう鎧を身に纏った人が見えた。

あ、めっちゃこつち睨んでる。例の如くフルフェイスの兜で顔は
見えないが。あれは絶対睨んでる。そんなオーラがしてる。

「と、とりあえず婆さん落ち着け！ それに俺勇者じゃないから！
！」

「やはりあたしの預言は間違ってた……！ 勇者様が来て下さ
った！」

ダメだ。この人まったく話聞いてない。そして俺に馬乗りの体勢
となっているこの人は結構重かった。

「それにしても、世界より先にあたしを助けて下さるとは……何とも
お優」

パソコン

気持ちいいほどに真っ直ぐな音が牢に響いた。

最後まで言い切る前に、老婆は背後から何者かに思い切り頭を叩かれたのだ。

秋斗は内心助かった・と思い、老婆を叩いた人物を見上げた。

「つたく、ばばあ五月蠅い！」

まず目がいったのは、蝋燭が照らす僅かな光の中でもよく見える金色の瞳。次に何色にも染まらないような黒髪。見た目からして歳は秋斗と同じくらいの青年は、秋斗よりもいくらか背が高かった。青年は秋斗に気付き、誰だ？、と間抜けに言っが、すぐに何かを思い出したらしく声を上げる。

「俺はスカイ！お前は？」

人懐っこい顔で言う青年——スカイは手を差し出す。戸惑っている秋斗だったが、その動作に反射的に応えた。

「あ、秋斗…。旗元秋斗」

その応えに満足したのか、満足そうな笑顔でスカイは腰を下ろした。

「アキトかあ。で、アキトは何やらかしたんだ？」

秋斗はスカイの質問に対して疑問に思うが、すぐにここは牢である事を思い出し納得した。

あの時の事を思い返しながらかかりやすく整理する。

「ん…、絡まれてた人助けたら勘違いされて俺まで捕まった…の

かなあ？」

「なるほど、それは災難だったな！」

面白い事を聞いた時のような、それこそ本当に気の毒だと思っ
ているのか、と疑いたくなる笑顔でスカイは言った。

スカイに対して軽く殺意を覚えた秋斗だったが、その後と言った
彼のここにいる理由、「食い逃げ」という言葉にその2文字は一気
に消え失せ、なんとなくスカイの性格を理解したのだった。

「ま、チンケな所だがわからない事があつたら遠慮無くこの俺に聞
きたまえ！」

全くもって頭が弱い青年である。

そんな彼に呆れつつも俺は一応ノってやる事にした。挙手。

「えっと、なら1つ質問。この婆さんは何でこんな所に？」

「あー、ばばあね。確か”オオカミが来た”って村中に言い回
ってたら捕まったって言うってたと思う！」

どこのイソツ――

「あたしは何処そのオオカミ少年だ！！！！！」

いつの間にか復活した婆さんはスカイを勢いよく張り倒した。
スカイ撃沈。。

てか一応ここ《・・・》でもあの物語通じるんだ。

「――ってーな、このばばあ！！！」

復活。

「小僧もさっきあたしを殴ったじゃないかい！年寄りもっと大切にしな！！」

婆さんも負けずに言い返す。

2人の間に火花が見えるのは俺の気のせいであって欲しい。

あ、見張りの人のオーラがもう我慢の限界っぽい。めっちゃ睨んでる。

「貴様らいい加減に——」「うつせえっつ——！！！！」「——スミマセン」

さっきまでのイライラをぶちまけようとした見張りは、反対に一瞬のイライラをぶつけられたのだった。

「あ、あの、お二方、とりあえず落ち着きマセンカ？」

2人の迫力にカタコトになりつつも、とりあえず事がこれ以上発展しないようにと、秋斗は説得を試みた。

老婆はその説得で冷静になったのか、スカイと距離を置き、ふんと、悪態をついた。

「あんな童話の嘘つき小僧と一緒にすんじゃないよ。あたしゃれっきとした預言者だよ」

”預言者”。

またもや秋斗の今までの人生では非現実的な単語が当たり前かのように出る。

だがここで今の疑問を出してもまたややこしくなりそうなので、

秋斗はあえてそれを心の中に留めておいた。

「——世界に異変起こる時 ”支配” と ”孤独” の象徴を持つ使者 異界より現る

その使者異変を取り去り 世界に再び平穏を呼び戻す——」

「!？」

「何だそれ？」

ふいに呟いた老婆の言葉に秋斗は顔を上げ、スカイは素直に思った事を口にした。

「つい最近あたしが詠んだ預言だよ」

秋斗は何処から湧き出て来る緊張感に息を飲んだ。

「で？何でそれがアキトなんだ？」

「 ”支配”、それ即ち赤。 ”孤独”、それ即ち黒を表す言葉じゃ。つまり、このお方こそが勇者様じゃよ」

そう言つて秋斗を——秋斗の髪を指差す老婆。

「ま、待て待て待て！俺が勇者で、勇者が俺……？んな馬鹿な！てかそんな事言われてもだな……!!」

「混乱するのもよくわかる。だがここでその話をする訳にもいかなのじゃ」

秋斗を宥める老婆は、眉をひそめ見張りを横目で見た。
なんとなくだったが、混乱した状態でも老婆の意図を理解することができた。

「でもよ、どうする事もできないじゃん！」

秋斗は言う。老婆もそれを感じていたのか、唸り、頭を捻らすし
かできないようだ。

そんな時――、

「何か良くわからんが…要するにここから出たいんだろ？」

こいつは一体何を言っているのだろうか…？

2人は同時に彼を――、

「んじゃ、とつとどこから出るとするか！」

自信に満ち溢れた金色の瞳の青年を見た。

第4話＊決行、脱獄大作戦（前書き）

長らくお待たせしましたm（――）m
奮闘記第4話です

今回は話の9割がギャグとなっておりますw

第4話＊決行、脱獄大作戦

「……………は？」

やつとの思いで発したものは随分と間抜けだった。

「だーからあ、ここから出るんだろ！？ それとも出たくないわけ??」

そう言っただけで先程自信満々で脱出宣言をしたスカイが、秋斗に詰め寄った。

「いや、出たいけど……は？どうやって??」

若干混乱気味の秋斗なのだが無理もない、それほど目の前にいる青年はとんでも発言をしているのだ。

秋斗は同意の意を込めて老婆に目を向けたが、当の本人はまだ固まっている。こういう時こそさっきまでの元気はどうした。

「あー！お前その目は信じてねえな！！　こんなのコレをこうやってだな……！」

スカイは秋斗に鉄格子の柵を持ち横に開く様を見せた。

「あゝ、なるほどね。……ってんな事できる訳——「開いとるぞ」

秋斗のノリツツコミは、老婆により両断された。

見事に転ける秋斗。てかいつの間に復活したんだばあ。

ツツコミ所が有りすぎて呆けるばかりの秋斗だった。

だが物事というのは、そう簡単にはいかないものらしい。

「き、貴様ら！」

先程の見張りが（立ち直り）戻って来たのだ。
もちろん見張りは囚人達（主にスカイ）の不信な行動に目がいく。
そして彼らのとっている行動を、

「何をして……ってえええー！！！」

理解した。立派なりアクション付きで。
その状況に混乱しているも、やはり訓練された兵。持っている槍
の先はしっかりと先頭にいるスカイの方へ向けられている。

「今すぐ牢に戻れ！さもなくば——」

ガンッ

「……」

響く音。

スカイが躊躇なく見張りに頭突きをかましたのだ。見張りは力な
く倒れた。

「さっ、行くぞ！」

何事もなかったかのようにスカイは先に行ってしまった。
兜を身に着けている見張りに対して、彼の頭には何もないのはき
つと気のせいなのだろう。

老婆と秋斗の思考がシンクロした瞬間だった。

数分、数時間。

どれくらいの時間が経ったのかは、それについての感覚が鈍っている秋斗達にはわからなかった。

ただわかるとすれば、牢から出て随分走っている事。そして老婆の「老人を労れ」発言により何故か秋斗が彼女をおぶっている事。

「なあ、まだ出口には着かないのか？」

「確かにのう。そろそろ外の空気を吸いたいものじゃ」

黙々且つ周りに気遣いながらさ迷う中、心身共に痺れを切らした秋斗は前に行くスカイに尋ねた。

「え？俺出口どこにあるかなんて知らねーけど」

「……………え？」

あっけらかんと言うスカイにたつぷり3秒。老婆はまたもや硬直。

「ま、その内着くだろ！…って、どした？」

どこをどういった過程で彼はこうなってしまったのだろう。
秋斗途方に暮れる一歩手前、

「さっきからうるせえんだよてめえら！」

3人の中の誰でもない声が訴えた。

老婆も今の声で硬直が解けたらしい。3人は同時に声のする方を見た。

その声の先は牢の内側。更に辿る。そこには小太りな男と細身の男、そして大柄な男が——って！

「……あ。……」

秋斗と囚人3人の声が見事に重なった。忘れる筈もない。ここ《……》に来る原因ともいえるチンピラ3人組だ。

「……って、お前、さつきはよくも！」

短い沈黙を破ったのは、秋斗の蹴りがクリティカルヒットした男——ブツタだった。

「勇者様、知り合いか……？」

「えっと、……まあ」

”知り合い”というような親しみのある関係ではない。かといって、全くの他人という訳でもない。

そう思った秋斗は老婆の質問に曖昧に答えた。

「……っかなんでてめえはそっち《……》にいんだよ！」

「それでヤンス！」

ブツタに続き今度は3人の中のリーダーである大柄な男——兄貴（仮）が声を荒げた。それに同調するのは細身の男——ヤンス。

一緒に連行された彼らにとっては確かに疑問を持つ点だ。

「んだよ、さつきから聞いてればよお……」

兄貴（仮）の言葉にいち早く反応したのはスカイだった。

「俺らは悪い事なんざ全くしてねーんだよ！だから出る、当然の事だ！」

いや、お前はしたからな、悪い事。

すかさず突っ込みを入れた秋斗。（もちろん心中で）そんな中、ふとある考えが頭をよぎる。

そういや何だかんだでコイツらもこれといって悪い事してないんだよね……。起こしそうにはなったもののあくまで未遂。

確かに騒ぎを起こしていたのは彼らが原因。だが、だからといってここまでされるのはどうなのだろうか。

王女がどうか言っていた気がするが、それでも道理に合わない。

秋斗がそこまでの思考に至った時には、既にスカイの名を呼んでいた。スカイがキョトンとしながらこちらを見ている。

「……そいつらも出してやってくれないか？」

「……は？」「……」

秋斗以外の声が重なる。
それを見て秋斗は苦笑。

「何ていうかさ、コイツらも特にここまでされる理由もない訳だし…さ。原因ではあるけどな」

「「「!?!」」」

「アキトがいいなら別にいいけど」「お前!」「」

スカイの言葉は兄貴（仮）達によって遮られた。
最後まで言えなかったスカイはむっとした表情になるが、3人はそれに気付く事はなく、秋斗の手をガシッと掴んだ。

「えーっと」

何事か状況が掴めない秋斗は、3人に若干引きつつも、手は振り払わないでいた。

「お前…、いい奴だな…」

代表して涙目の兄貴（仮）が言う。
ブツとヤンスに至っては、鼻水まで垂らしている。
感慨深い奴らだ。

「じゃ、開けるぜー」

「おー」

スカイの合図に秋斗はやる気なさ気に返事した。牢の向こう側の3人は頭に”?”を浮かべている。
スカイが例の如く鉄格子を開ける。

3人の目が点になり、固まるのはそれから1秒。老婆がいつまでも固まっている3人に苛立ち、どつくのはその5秒後。同時に早くも3人に興味がなくなり先に行こうとするスカイ（勿論出口など知る筈もない）に秋斗が気付き、止めるのはその2秒後。

「んゝ、やっぱ外の空気はいいな！」

皆より先に行くスカイは、伸びをしながら雲一つない空を仰ぐ。

あの後、なんとヤンスが外に出られる抜け道を知っていた。（何故知っていたかはあえて聞かないでおいた）

いろいろな障害（主に金眼の青年関係）はあったものの、秋斗達は無事脱出に成功したのだ。

「おっと、まだ気は抜けないぜ」

緊張感を緩まずスカイに兄貴（仮）は待ったを掛けた。

「家に帰るまでが遠足、ってか」

兄貴（仮）の言動の意図を読み取った秋斗は続ける。

脱出中、最初は両者ギクシャクしていたものの、その内打ち解けたのだ。

「そういう事だ。そろそろあちらさん《……》も感づいてる頃だろう」

「ならあたしの家へ行こう。すぐ近くにあるよ」

「それは助かる」

かくして一行は老婆の案内により、足早に再び歩を進めたのだ。
った。

森に佇む一軒の少し古い家。近くに村があるらしいが、老婆はあえてそこよりも少し外れに建てたらしい。

チンピラ3人組はその村の者だったらしく、途中で別れた。
そして今、秋斗、スカイ、老婆の3人はテーブルを囲んでいる。
(スカイは成り行きで)

「…で？」

好奇心を抑える事なく、眼を爛々とさせながら老婆に詰め寄るスカイ。

「そう急かすんじゃないよ」

老婆は先ほど淹れた紅茶を含みつつ、やんわりと彼を止めた。

「さて、じゃあまずは世界の”異変”について話そう」

「異変…？」

秋斗の反応に老婆は頷く。

「そう、一番表に表れていると言えば、モンスターの大量発生じゃない」

「モンスター…って…」

おいおい、モンスターまでいるのかよ。
確かに俺のいた”世界”とは違う点は沢山あったが……、ここまではな…。

「それなら俺も知ってるぜ！」

スカイが元気よく身を乗り出してきた。彼の傍らに置いてあかつプの中の紅茶が大きく揺れる。

「変わった事っていえばそれだけじゃないぜ。確か——」

バタンッ

突如開かれた外へと続く扉。それと同時に見覚えのある兜と鎧を纏った兵達が入って来て素早く銃器を構える。

「全員大人しく投降しろ」

兵達の後から入って来たのは一度見たら忘れられないちよび髭。

彼は引き摺っていたソレ《・・・》を秋斗達にも見えるように上げた。

「この男のようにならなくなかったらな」

「「「!?!?」「」」

秋斗達が絶句するその先には――所々から生々しい血を流している兄貴（仮）がいたのだった。

――そう、秋斗達が気付いた時には既にコト《・・・》は起こっていた。

秋斗達が気付くには遅すぎたのだ――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1616i/>

異世界奮闘記

2010年10月10日05時13分発行